ひたちの文化

2 エッセイ⑦ 海野　定文さん
3 日立市文化少年団ご紹介 新
3 日々を詠む⑩ 選・評　三浦　武也さん
4 My 仕事 ㉖ atacamaki photography さん
ふるさと探訪パートⅡ㉑ 5
10Qじいじさんのちょっと笑える夜空のお話し ⑩ 6
チーズこぼれ話 最終回　木樽　博さん 7
ひたち街角小劇場10周年記念公演 8

「湧　水」

撮影：島田　道子さん（日高町在住）
撮影場所：泉が森

毎年この季節に入ると各地で起こる、豪雨による水害。全てを呑み込み、数多の命を奪い去る水には憎しみの目が向けられる。しかし、水は何ら意思を持たず、ただ「高きから低きに流れる」という自然の摂理に忠実に従っているだけに過ぎない。

されど逆に水は命を繋ぐこともある。人体の60％が水分で構成されている我々人間は、コップ一杯の水によって渇きから救われることもある。また日照り続きの後の雨は動物だけでなく植物にとっても等しく恵みの雨である。地球上に生を受けている以上、水との繋がりは断ちがたい。

目の前に静かに湛える泉。そこから絶え間なく湧き出る水に神聖な何かを感じさせられるのは、人間の感性が境内という場所柄を反映させているからだろう。だが、この水もまた物理法則を忠実に守っているに過ぎないのだ。

水辺に歩み寄り、なんの気無しに首を伸ばし水底を覗き込むと、自身の顔が水面に映った。雑念にまみれ、不安と煩悶が混じり合った表情。己の顔ながらそこに嫌悪感を覚え、思わず目を逸らしてしまう。

泉から溢れ出た水は、小川となって澱（よど）むことなく流れて往く。小さな人間の苦悩など洗い流すかのように、緩やかに滔々（とうとう）と。やがては他の川と合わさり海へと向かうのだろう。水よ、大海へ辿り着くまでに誰も傷つけてくれるな、と願わずにはいられない。

エッセイ ⑦

流鏑馬（やぶさめ）「バンザイ！」

海野　定文

海野　定文（うみの　さだぶみ）

県庁で土木行政全般、主に道路・港湾の整備や防災・長寿命化などの維持保全に携わる。東京ガスのLNG基地と幹線パイプラインの建設5か年プロジェクトに顧問として関わる。流鏑馬保存会会長5年目。大久保三城（3つの山城）史蹟の活用保存のグループに加わり、楽しく活動している。

「タダイマー」「神社に馬が来てるよ。行ってくるねー」子供たちの元気な声。カバンを放り投げて、一目散に神社へ走っていく、我が家の息子と娘です。

鹿嶋神社（大久保町）の流鏑馬は、参道前の元県道で行われ、3か所に的を立て、1から3の的を順に、計9回矢を射ます。沿道には、大勢の人が集まり、我こそは、矢を取ろうと身構えて、馬の来るのを待っています。矢が射られると、人々が団子状態になり、矢の争奪戦。暫くして、矢をかざした手が高々と上がると同時に、「バンザイ」の声。戦いの終了です。大人も子供も大はしゃぎ。観客ではなく、まさに、自分が主役です。今から30年くらい前、そこには、伝統の流鏑馬風景がありました。

現在も流鏑馬は、毎年10月29日秋季例大祭で行われています。河原子海岸で潮垢離（しおごり）の後、下孫鹿嶋神社でお祓いを受け帰社。祭典の後、流鏑馬の執行です。近年、交通事情などから、神社参道で行なっています。神事の後は、子供武者の流鏑馬です。

河原子海岸での潮垢離

弓を引き絞る射手（鶴岡良造氏）

元の道路での流鏑馬執行が目標です。

当社の流鏑馬は、佐竹氏が関わり、天正12年（1584）9月起源と伝えられ、茨城県内で最も古い流鏑馬と言われています。

鎧兜の製作風景

東日本大震災で、当社も甚大な被害を受け、復旧委員会を組織して、大鳥居や社務所の再建などに取り組みました。この活動が一つの契機となり、神社に対する氏子・崇敬者の皆さんの関心が高まり、平成30年2月に流鏑馬保存会の設立に至りました。最初は「文化財指定を目指す」活動でした。市の関係者の皆様にご指導をいただき、平成31年1月に「市指定無形民俗文化財」の指定を受けることが出来ました。

近年、少子高齢化や若手後継者不足など、伝統文化の継承は、大きな課題となっています。

流鏑馬の伝統を、後世に伝えていくには、子供たちの参加が大きな力になるのではないか。また、明和2年（1765）の史料に「5月5日に騎射の祭りあり」との記録があり、子供武者の甲冑製作に取り組むことになりました。平成30年から始め、今年で鎧9領、兜9頭が揃いました。氏子有志のすべて手作りです。令和元年には、各町内から子供武者が参加し、大盛況でした。今年こそは、コロナが収まり、凛々しい若武者姿の子供たちに、流鏑馬を大いに楽しんでほしいと願っています。

子供武者たちが勢ぞろい

430年以上連綿と続く、郷土の伝統文化を、これからも末永く伝承していくことは、今の私達に課せられた大切な役割だと思っています。

流鏑馬「バンザイ！」鹿嶋神社の流鏑馬をいっしょに楽しみませんか？

ほっこり！素敵な出会い

今年の4月に日立シビックセンターから市民会館に異動となった。新しい環境で、正直戸惑う部分もあったが、周囲から温かいアドバイスや助けをもらいながら仕事に励んでいる。

市民会館では少ない人数で事業や施設管理を回している。そのためあらゆることに精通し、オールマイティにこなさなければならない。

自分にとってホールの舞台に入るのも初めての経験である。そのため普段聞きなれない舞台用語に混乱することもあるが、コミュニケーションを取りながら仕事に取り組んでいる。学びの毎日で、一日一日がとても充実している。

自分にとっては一年間に何度も対応するピアノの発表会であっても、発表する子どもたちや先生、保護者の方にとって、その発表会は一生に一度の替えのきかないものである。「一期一会」という言葉を胸に刻みつつ、皆様が素敵な思い出を作ることができるよう、日々精進してまいりたい。

まちのサロン　市民会館

さまざまな文化に触れよう！

日立市文化少年団ご紹介

日立市文化少年団をご存じでしょうか？日立市では現在25の文化少年団がさまざまな分野で文化活動に取り組んでいます。どの団体も幼少期から多様な文化に触れ、日本の伝統文化や新しい生活文化を学ばせることを目的としています。また、次世代への文化の継承という意味でも文化少年団は大切な役割を担っています。今号より2団体ずつ、本誌面で紹介してまいります。

日立将棋連盟子供クラブ

現在私達、日立将棋連盟子供クラブは小学校1年生から中学2年生まで、総勢24名（女子3名）で活動しています。学校、学年関係なく、とても仲のよい少年団であることが自慢です。

僕は初心者の小学2年生で入団して6年目になりますが、経験を積み重ねて初段になれました。レベルに合わせた子供大会が開催されるため、大会に出ることが励みになり、集中力も身につきます。また、相手の指す手によっていろいろと考えなければならず、そこが将棋の面白いところです。

将棋に興味のある方、私達と対局しましょう。ぜひ一度遊びにきてください。

（泉丘中学校　1年　伊藤（いとう）　一進（いっしん））

日立将棋連盟子供クラブの案内

活動日時　毎月第3土曜日　10:00～12:00
会　　場　大沼交流センター
会　　費　1,500円/年
参加資格　市内近郊在住の年長～中学3年生
そ の 他　将棋大会　1月　小学生将棋名人戦県大会
　　3月　ひたちこども芸術祭
　　9月　日立市民将棋大会（子供の部）
問い合わせ　日立将棋連盟会長　矢代　豊　090-5317-9787

日立茶道文化少年団

私達は、自然環境に恵まれた、ここ日立で生活しています。そして、充分に四季を堪能しています。

このような恵まれた風土に生まれた子ども達に、四季折々のすばらしさを花・菓子・点前・室礼を通して感じていただきたい、それを可能にするのが生活文化としての茶道であると考えています。

そのため、茶道を通して①挨拶②物を大切にする心　③相手を思いやる気持ち　そして④感謝の精神を指導していきたいと思っています。

大変大きな理想ですが、単に茶道のみの観点に留まらず、少しでも子ども達の日常生活の中で、自ら感じ、自ら考え、自ら行動する一助となるよう願っています。

子ども達は、未来の日立の輝く宝です。みんなで守っていきたいものです。

（指導者　末松（すえまつ）　宗倫（そうりん））

日立茶道文化少年団の案内

活動日時　6、7、10～12、2、3月の第2日曜日
　　13:30～15:30
会　　場　助川交流センター
会　　費　500円 /回
参加資格　幼稚園児から高校3年生まで
問い合わせ
日立茶道文化少年団代表　末松　宗倫　0294-35-1091

100 日々（にち にち）を詠（よ）む

《選・評　三浦　武也》

また一つ昭和が消える店仕舞い

堀江　慶宏

少子高齢化と言われる時代にあって街へと出る機会も減った。銀座通りと言われ賑わった街も、シャッター街と言われて久しい。そこへコロナ禍が襲い、見る影もない。そんな世相をうまく詠んだ一句である。（句会での特選句）

My 仕事 ⑫⑥

自分の想像を超える写真を追い求めて

atacamaki photographyさん

日立市出身のフォトグラファー・atacamakiさん。霞ケ浦のほとりのトレーラーハウスを改修した一軒家に住む彼は、親しみやすくそれでいてどこか旅人のような佇まいを漂わせる。インタビュー記事から幾分でもその雰囲気を感じ取っていただければ幸いである。

――二十代の頃からさまざまな仕事を経験してきました。ボーカルインストラクターとして歌を教えたり、一年だけですがかみね動物園の臨時職員を勤めたこともあります（笑）。そんな折に、海外の方が日本に滞在する期間、カメラマンとして一か月同行して、記録写真を撮り続けるという仕事の話をいただき、報酬がよく私の予定も空いていたので引き受けました。結局その方の来日は実現しなかったのですが、これを契機にフォトグラファーになろうと思い立ちました。しかし当時は写真で食べていけるかわからなかったので、自分の中で「一年間写真の仕事だけで暮らせたら、仕事として続ける」と決めて取り掛かりました。写真以外の仕事はせず、全国どの地域から依頼が来るのかを探り、仕事として成り立つか見極めることにしたのです。

――バックパックに服とカメラだけ入れて身軽な状態で各地を放浪し、当初一年の予定だったのがタイミングを見失ってそのまま三年ほど続きました（笑）。カメラの専門的な勉強をしておらず後ろ盾がない状況で始めてはいますが、お試し期間を経てある程度算段をつけてから仕事としています。周りからは無謀なチャレンジと思われがちですが、私自身はそのつもりは全くありません。

――私は人を撮ることを専門にしていますが、「ハイ、チーズ」と言われて意識的に作る表情ではなく、オフショット、つまりその人の自然な、何気ない表情を撮るように心がけています。バレエ団の発表会の写真撮影を頼まれた時ですが、客席側からは固定のビデオカメラで撮るだけにして、私は舞台裏で準備をするバレリーナについて回り、出番前の緊張した面持ちや次の演目を確認するさまをカメラに収めました。また七五三の撮影依頼を受けた時は、家を出るところから撮り始め、着付けを嫌がる様子やお参りするところ、親戚と合流してお昼をとるところ、家に帰って緊張から解放される瞬間までをカメラに収めました。十年、二十年後に見返した時に、集合写真よりも舞台裏の自然体な写真の方が思い出を細かに伝えてくれると思うんです。集合写真のようないわば表側から撮る写真は一枚あれば十分で、舞台裏の写真をたくさん撮って依頼主に届けたいと考えています。

――カメラだけを持って各地を渡り歩いていた頃、そろそろ定住をと考え始めた時期に紹介してもらったのが今のこの住まいです。庭先は野生のアライグマが顔を出すくらい自然に溢れていますが（笑）、友人知人には心を休める場所として自由に過ごしてもらうこともあります。日常生活に疲れた時、火を起こしその傍らで読書をしながらぼんやりと過ごす。あるいは友人と一緒に賑やかに過ごしてもいい。家庭と職場以外にそんな場所があってもいいと思うんです。私自身、コロナの影響で写真やその他の仕事の依頼がゼロになった期間もありましたが、そんな時はひたすら家でご飯を作ったり薪を割ったりして日々を送っていました（笑）。

――仕事として経験を積んでゆくと、ハズレの写真が少なくなり、ある程度思い通りのものが撮れるようになってきます。でも思い通りということは自分の想像を超えてくれないということでもあるんです。自分の想像を超えてくれる写真、自分の人生を変えてくれるぐらい自分が感動できる写真を楽しみに毎日撮っています。

レンズの先に写るものは

焚火を囲みながらの談笑

木立に囲まれた一軒家

舞台袖からのリハーサルの眺め

さまざまな感情が交差する瞬間

ふるさと探訪パートⅡ－ ㊶

荒木一門の花鳥画と茨城・日立（1）

大森　潤也（日立市郷土博物館学芸員）

日立市郷土博物館では1975年（昭和50）の開館以来、絵画を中心に美術作品の収集・展示を行なっている。当初から日立および茨城にゆかりのある近現代の美術家たちの作品によってコレクションを形成してきたが、郷土作家を基点として徐々に周辺への拡がりを持たせようとしてきた結果ひとつのまとまりとなったのが、日立出身の五島耕畝（こうほ）と関啓畝（けいほ）が師事した荒木寛畝（かんぽ）とその一門（読画会）の花鳥画作品群である。本稿ではそれら日立にゆかりのある近代の花鳥画とその関連作家について紹介したい。

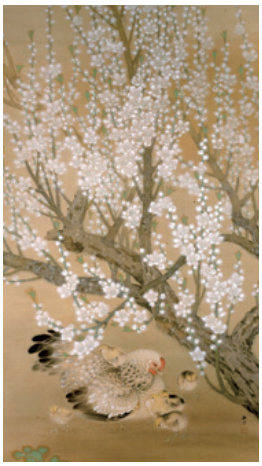
「花鳥画」と「日本画」

東洋の伝統的な画題である花鳥画は、中国六朝時代に独立した主題として描かれるようになった。その後に草花のみを描く花卉画、草花に昆虫を配した草虫画、鳥の代わりに小動物を描くものなどが現れている。

日本では鎌倉時代に宋元画の影響を受けた水墨花鳥画が描かれ、室町時代には院体画系の彩色花鳥画、桃山時代には豪奢な金碧障壁画の様式が確立された。それらを受けて江戸時代に狩野派、土佐派、琳派、長崎派（南蘋派）、円山四条派などのさまざまな流派によって描かれるようになり、花鳥画は日本固有の「花鳥風月」の美意識、つまり天地自然の景色を四季折々に愛でる心を表現する、日本絵画の代表的な主題のひとつとなった。

またオランダ経由で西洋絵画の影響を受けた江戸時代中期の小田野直武ら「洋風画」における花鳥は、写実的な表現を援用して動植物の生態を記録する博物学としての役割も帯びていた。

明治になって西洋美術が本格的に移入されて以降、従来の絵画を基盤に洋画技法も採り入れた「日本画」（この言葉はフェノロサの講演を翻訳した『美術真説』で用いられた）が描かれるようになる。そのような中で花鳥画に境地を拓いた画家が、五島耕畝と関啓畝の師・荒木寛畝である。



五島耕畝《長閑》大正15年
（日立市郷土博物館蔵）

荒木寛畝とその門弟たち

1831年（天保2）に江戸で生まれた荒木寛畝は、谷文晁の流れを汲む南北合派の画家として活動し、幕末に山内容堂の知遇を得て土佐藩絵所預を明治初頭まで務めた。土佐藩を辞した後に寛畝は、当時大きな拡がりを見せていた洋画に転身する。先覚者である川上冬崖に就いて油彩技法を習得し、高橋由一、五姓田義松と並び称される手腕を発揮した寛畝であったが、前述のフェノロサと岡倉天心らによる日本美術復興の気運が高まった1882年（明治15）頃には、本来の画風に戻っている。

江戸末期から寛畝は人物画、水墨淡彩による山水、細密な花鳥画まで幅広く描き、総じて近世の様々な流派を折衷した画風を呈した。洋画を経て日本画に戻ってからの寛畝は内国勧業博覧会や諸外国での万国博覧会などで受賞を重ね、当時国内最大の美術団体だった日本美術協会を基盤として目覚ましい活躍を見せた。一方で1898年（明治31）には橋本雅邦の後任として東京美術学校教授に就任し、さらに1907年（明治40）に発足した文部省美術展覧会（文展）では審査員を務めている。

こうした活躍をとおして寛畝は、古典的な花鳥画に実証的写実を加味した花鳥画で知られることとなった。自ら解剖まで行なってモチーフの生態を観察した上に、日本古来の筆致の妙味を定着した、寛畝の理想と流風は、多数の門弟たちに受け継がれていく。

1905年に寛畝の画塾が組織化されて誕生した読画会の画家たちもやがて官展で評価されるようになった。寛畝門下からは鈴木啓処、荒木十畝、高瀬五畝、池上秀畝、五島耕畝、広瀬東畝、松下雲畝、永田春水、関啓畝、湯原柳畝らが輩出し、近代の花鳥画を標榜する一門の活動に貢献している。中でも荒木十畝、池上秀畝、五島耕畝の三人は寛畝門下の俊英として「三畝」と並び称された。

友の会だより

ひたち市民会館 友の会

惜別友の会

去る5月22日（日）の特別落語会は、盛会のうちに幕を下ろした。長く市民に親しまれてきた入船亭扇遊師匠の落語には来場者全員が心から笑わせていただいた。扇遊師匠はじめ、林家正蔵師匠並びにご出演いただいた皆様に改めて感謝申し上げたい。

昭和59年に産声を上げた友の会は、3代の会長を戴き、多くの事業を実施してきた。「文化芸術を楽しむ」を合言葉に、バスに揺られて各地の観光名所や美術館を巡ったり、歌舞伎やミュージカルを東京まで出向いて鑑賞したり…。みんなで繋いだ距離は一体何万キロに達しただろう。そのすべての活動を無事に終了することができた。

事務局として至らないことが多々あったと思う。それでも200人を超える会員が一緒に居てくれた。感謝。今まで携わってくれた全ての会員、関係者の皆様！本当にありがとうございました。

10Qじいじさんのちょっと笑える夜空のお話し

⑩天の川の正体

最近は、地方でも街明かりのために星が見えにくくなっています。まして天の川を見られる場所は限られています。一説によると世界中の人口の3人に1人は天の川を見ることができない場所に住んでおり、日本に限れば7割ほどといわれています。皆さんの中でも天の川を見たことがない方がいらっしゃるかもしれませんね。それほど現代の夜空は明るくなっています。もちろん明るくなってよかったこと便利になったこともあります。しかし、「光害（ひかりがい）」という言い方をされることもあります。

さあ、ここからが本題です。そもそも天の川とは何でしょう。天にかかる川のようなものというわけですが、皆さんの想像通り天の川とは星の集まった場所です。星がたくさん集まっているため夜空の中で周りより明るく見えるのです。では、なぜここに星が集まっているのでしょう。

皆さんは銀河系という名前を聞いたことがあるでしょう。私たちが住む太陽系も銀河系の中にあり、銀河系の中心から2万8千光年ほど離れた場所を2億年ほどかけて一周しています。この銀河系は別名「天の川銀河」と呼ばれ、まさにこれが天の川の正体なのです。天の川銀河は「棒渦巻き銀河」という種類の銀河で、棒状の両端から腕が伸びて渦を巻いている形です（下図左）。天の川銀河は下図右のように中心が膨らんでおり（星が集まっている部分）、端に行くほど薄くなっていきます。直径は約10万光年で、その中には約2千億個の恒星があるといわれています。天の川は七夕伝説が有名なこともあり、夏のイメージが強いと思いますが、冬にも天の川を見ることができます。

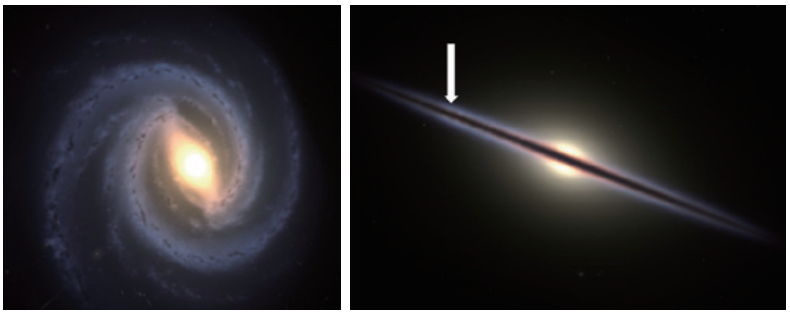
太陽系は下図右側の矢印のあたりにあるのですが、その位置から銀河の明るい中心方向を見ているのが夏の天の川で、反対の外側の方向を見ているのが冬の天の川です。つまり私たちは天の川銀河の中から銀河の中心や中心と反対の方向を見て、それを天の川と呼んでいるのです。

天の川は英語で「Milky Way（乳の道）」と呼ばれています。ギリシャ神話では、最高神ゼウスが妻のヘラ以外の女性に産ませた息子のヘラクレスに永遠の命を与えようとヘラが寝ている隙にヘラクレスにその乳を飲ませようとしました。しかしヘラクレスの乳を吸う力が強く、目を覚ましたヘラに引き離され、その時ほとばしり出た乳が天に散らばってできたため、「Milky Way（乳の道）」と呼ばれるようになったといわれています。

皆さんも是非、街明かりが届かないような場所に行ったときには、天の川を探してみてくださいね。

ちなみに、地上にも天の川はあるのですが……。大阪の「天野川」、奈良の「天の川温泉」（読み方は「てんのかわ」ですが）どちらもちょっと残念！

おっと、北海道に「天の川」があった！　えっ、二級河川登録名は「天野川」かあ。



天の川銀河

ひたち市民オペラ25周年記念公演

歌劇 ≪トゥーランドット≫ ハイライト&オペラガラコンサート

日　時　9月19日（月祝）午後2時開演
会　場　日立市民会館ホール
料　金　全席指定　S席5,000円　A席4,000円
A席高校生以下2,000円
※未就学児入場不可
申込・問合せ　日立シビックセンター
(TEL0294-24-7720)

ひたち市民オペラの活動25周年を記念して、これまで開催してきた公演の中から≪カルメン≫、≪アイーダ≫、≪マクベス≫の3演目をガラコンサートで、2001年に開催した初回野外オペラ公演の≪トゥーランドット≫をハイライトでお贈りします。

ひたち秋祭り

日　時　10月8日（土）正午
10月9日（日）午前11時開演
会　場　日立シビックセンター新都市広場
料　金　入場無料
問合せ　日立シビックセンター
(TEL0294-24-7711)

全国各地から招待した郷土芸能団体の夢の競演に加え、市内中学校・保育園・認定こども園による郷土芸能発表をお楽しみいただけます。また、今年は2日目にジャズ公演をお贈りします。

チーズこぼれ話 終

執筆者プロフィール

木博（こぐれ） 博（ひろし）

1948年群馬県出身。1972年から日立在住。NPO法人チーズプロフェッショナル協会顧問。1995年から日立酒楽会（ひたちさらえ）を主宰。県北でチーズ、ワイン、ウイスキーなどを楽しむ会を主催。ワインエキスパート。チーズプロフェッショナル。フランスチーズ鑑評騎士。東京ウイスキー&スピリッツコンペティション審査員。

同じ牛乳から出来る 3種類のチーズ

今回は、同じ牛のミルクから違う種類のチーズが作られている例を紹介します。フランスースイス国境のアルプスの山岳地帯（フランシュ＝コンテ地方）では山岳環境に適したモンベリアード種の牛が主に飼育されています。この地域では地形、季節により搾乳量・集乳量が大きく変化するため、3種類のチーズが作られています。

1つ目は大型で長期熟成される「コンテ」チーズ（ハードタイプ：大きさは約40kg、約400ℓの牛乳から製造）、2つ目は中型の大きさで数か月の熟成の「モルビエ」チーズ（セミハードタイプ：大きさは約5～8kg、50～80ℓの牛乳から製造）、3つ目は小型で1～2か月で熟成する「モンドール」チーズ（ソフトタイプ：大きさは400gと3kgで、4～30ℓの牛乳から製造）です。

モンベリアード種の乳牛
（フランシュ=コンテ地方）
写真提供：フェルミエ

この地方の大型チーズ作りは千年以上の長い歴史を誇っています。アルプス山中のこの地方では、冬の町や村は大雪で閉ざされてしまうため、春から秋にかけては高原に咲く沢山の草花をいっぱい食べた牛から搾乳したミルク約400ℓから約40kgの大型チーズの「コンテ」を長期保存用として作っていました。沢山のミルクが必要になるため多くの農家が協同組合を形成しミルクをその工房（フリュイテール）に持ち寄りチーズを製造します。コンテ1個を製造するために20～25頭の牛のミルクが必要になります。コンテはフランシュ＝コンテ地方全域で作られています。特に季節、地域によってはコンテ製造には乳量が不足する（400ℓに達しない）場合があり、約50ℓでチーズ1個を製造できる中型の「モルビエ」を作りました。中型のモルビエの場合、チーズ製造時に型の半分まで入れたチーズの表面に釜のススをつけて置き、次回製造時に継ぎ足して一個にしたため、チーズの中間に黒いススの線が入るようになりました。また搾乳量が減少する冬季に標高700m以上の村では雪で道路が寸断されミルクを集められず、個々の農家でミルク4ℓから30ℓで作れるモンドールを作っていました（現在では9月中旬から翌年の3月中旬までに限定製造）。現在では自宅製造の習慣は無くなり近くの小さなフリュイテールで昔と同じようにモンドールを作っています。モンドールが熟成するとトロトロになるため経木のケースに入れて製造・出荷されます。

パリのサロン・ド・フロマージュ2013にて
左下：コンテ
左下2番目、右上：モルビエ（切断面に黒線）
右下：モンドール（経木の円形ケース入り）
©KOGURE

3種のチーズはチーズの製造法が違いますが、熟成による旨みや香りが芳醇なコンテ、サッパリと食べやすいモルビエ、トロトロ熟成をスプーンで頂くモンドールと各々を楽しむことが出来ます。ミルクを有効に使うために上手く作り分けられていますね。コンテ、モルビエは一年を通して楽しめますが、特殊なケースですが「モンドールには旬がある！」と言えますね！

トロトロに溶けたモンドールを
パスタにかけて頂く
©KOGURE

左：モンドール（ヴァシュラン・デュ・オー＝ドゥ）（小型ソフトチーズ）
（流れ出さないように経木の円筒ケース入り）
中：モルビエ（中型セミハードチーズ）（中央に黒い線が有り）
右：コンテ（大型ハードチーズ）
画像は3点ともCPAチーズの教本より

MYSTERY NIGHT TOUR 2022
稲川淳二の怪談ナイト～稲川怪談30年連続公演～

日　時　10月30日（日）午後2時開演
会　場　日立市民会館ホール
チケット　全席指定　一般前売り　5,800円
当日　6,000円
シビックメンバーズ　5,600円
※未就学児入場不可

30年連続公演の「稲川淳二の怪談ナイト」
今年は公演30年の時を経て、さらにパワーアップして登場…
心臓の弱い方、憑りつかれ易い方はご注意ください…

純烈ライブ2022 ～貴方とともに～

日　時　11月6日（日）
午後1時／午後4時 開演
会　場　日立市民会館ホール
チケット　全席指定　一般前売り　5,500円
当日　6,000円
シビックメンバーズ　5,300円
※未就学児入場不可

平均身長183cmの高さを活かしたパフォーマンスと、”スーパー銭湯アイドル”として脚光を浴び、今や大人気のムード歌謡コーラスグループ「純烈」いよいよ、日立に参上！

問合せ・申込先　日立市民会館（TEL0294-22-6481）

ひたち街角小劇場 10 周年記念公演

「いつでも夢を～吉田正と喜代子の夢～」上演のご案内

皆さんは吉田正という人物をご存じでしょうか？ 1921年(大正10年)に高鈴村助川(当時)で生まれた吉田正は、「いつでも夢を」「異国の丘」などを世に送り出し、戦後歌謡界を代表する作曲家の一人に数えられています。

今回、ひたち街角小劇場では吉田正とその妻・喜代子夫人の絆にスポットを当てた演劇「いつでも夢を～吉田正と喜代子の夢～」を10月に多賀市民会館で上演します。吉田夫妻について史実を丹念に調べた上で、観る人を楽しませる上質のエンターテイメントとして作り上げています。出演者・スタッフが一丸となり、観客の皆様に感動をお届けできるよう全力で準備に取り組んでおります。ぜひお誘い合わせの上、劇場に足をお運びください。

ひたち街角小劇場第54弾　ひたち街角小劇場 10周年記念公演「いつでも夢を～吉田正と喜代子の夢～」

上演日時　令和４年 10 月 15 日（土）午後６時 00 分開演
10 月 16 日（日）午後２時 00 分開演

会　　場　多賀市民会館２階ホール（日立市千石町２丁目４－20）

出　　演　ひたち街角小劇場 ProjectTeam 加盟劇団　ほか

入 場 料　全席自由
前売り　一般：1,000 円（当日 1,200 円）
小中学生：　500 円

ご予約・お問合せ　多賀市民会館
☎ 0294－34－1727

ひたちの文化のバックナンバー

財団HPにて
好評掲載中！

(http://www.civic.jp/hitachi/magazine)

編集後記

■表紙の文章執筆に思い悩み、泉神社を訪ねてみた。恥ずかしい話、市内でも五指に入るこの神社を今まで参拝したことがなかった◆実際に目にした泉が森は、写真の想像よりはるかに湧水量があり水も澄んでいた。訪れた日は小雨混じりでしっとりとした佇まいだったが、社務所の方の話では晴れた日はより一層厳かな雰囲気を醸し出すそうだ。再訪の日が楽しみになった■本殿の横には厄割石（やくわりいし）という石が鎮座している。陶製の玉を投げると厄が落ちるのだという◆社務所で玉を買い求め、石めがけて全力で投げつける。乾いた音を立てて玉は砕け散った■厄が落ちたかどうかはわからない。だが、間違いなく気分が晴れやかになった。（A）

「チーズこぼれ話」は今号で終了となります。木樽博さん、ありがとうございました。

表紙の写真

天速玉姫命（あめのはやたまひめのみこと）を祭神とする泉神社は、中世にこの地方一帯を支配した佐竹氏と縁が深かったと言われる。毎分 1,500L もの水が湧き出る境内の泉は、常陸国風土記にも「密筑（みつく）の大井」として記述が見られ、古来より民衆の生活に深く根差していたことが窺える。

写真は日高町の島田道子さんの撮影。ふるさと日立カレンダー応募写真より拝借しました。

発行　公益財団法人日立市民科学文化財団
「ひたちの文化」編集委員会
〒317－0063　日立市若葉町１－５－８　日立市民会館内
TEL　0294－22－6481　FAX　0294－22－6633
HPアドレス　http://www.civic.jp
※ご意見・ご感想をお寄せください。